

その後三年間勤務しました。昭和四十五年、県営
笛吹川発電所に勤務。昭和五十二年、山梨県庁を
退職。

従来、生地の穴山に農地があり、桃、リンゴの
果物、野菜を栽培していました。甲府より西方二
十キロの地で、雨天を除き家内と共に私の運転す
る車で行き、農作業に励んでいる次第で、健康に
恵まれているから出来る幸せであります。

護衛艦隊勤務を回顧して

佐賀県 國 廣 初 男

私は海軍の少年兵志願者で、当時の家庭は父、
母、私、弟三人、妹二人の八人家族で私は長男で
した。家業は漁業で「かき」の養殖業でした。戦
後は海苔の養殖が主体となり、副業として玉ねぎ
と米作をやっております。学校は鹿島村立尋常高
等小学校の高等科を卒業し、十五歳になって海軍
を志願しました。その時、鹿島村からは五十人も
志願者がいました。

佐世保第一海兵団で受験の結果、六十点以上の
成績だったので合格となり、続いて適性検査があ
りました。私は第一希望を少年航空兵に、第二希
望を少年通信兵を指定しましたが、検査の結果、
少年通信兵に合格しました。

昭和十九（一九四四）年二月五日、山口県の防
府海軍通信学校に入校、第七十期普通科練習生と

なり二等水兵を命ぜられました。当時、海軍通信
学校は横須賀と防府に在りました。防府は新設の
学校で校舎は新しかったが校庭は埋立て地でまだ
ブヨブヨしてました。

教育は三カ月で陸戦等の基礎教育を終わり、五
月には特信（外電傍受）を受験し、合格したので
横須賀の海軍通信学校へ入校、一等水兵に任命さ
れました。入校後は学科（英語）の試験、試験の
連続でした。

特信は外国の通信を傍受するのが任務ですから
英語が分からなくては仕事にならないのです。周
波数が違うので発信先が分かるのです。試験に二
回失敗すれば退校、海兵団行きですから厳しかっ
たです。服の袖に桜花のマークか八重桜のマーク
が着いてなければ一般の水兵ですから惨めなもの
でした。マークは学校出の印で、実技の所有者を
表しますので肩身が広いわけです。桜花のマーク
は普通科、八重桜のマークは高等科出身を表しま
す。

そのころの戦局は敗色日々に濃く、ガダルカナ
ルは既に敵手に落ち、山本長官が戦死していたこ
とは全く知らされなく、ただひたすら修学に没頭
していたわけでした。

昭和十九年八月、通信実習のため静岡鈴川通信
実習所に入所しました。昭和十九年十月十日、横
須賀海軍通信第七十期普通科練習生を八カ月かか
って卒業することになりました。直ちに同日付け
で第一護衛艦隊司令部付を命ぜられ台湾の高雄に
行きました。シンガポールに行くのかと思いまし
たら戦況悪化で司令部が台湾の高雄に後退した。
十一月五日に上等水兵に進級しました。

横須賀から戦艦「日向」に乗船、台湾の高雄に
行きました。シンガポールでは海上護衛隊と呼ば
れていたようですが、高雄では第一護衛艦隊に改
称されたようで、それだけ船団護衛の重要性が戦
況悪化と並行して増加してきたのだと思います。

第一護衛艦隊の旗艦は巡洋艦「鹿島」でした。
「鹿島」は元は練習艦で、兵学校の生徒を乗せて

遠洋航海に出ている艦ですから艦形がスマートでした。しかし旗艦になってからは対空火器を増強して、まるで針ねずみのように重装備になっていました。排水量は五、八九〇トンです。

通信兵でも「いざ」となれば戦闘に参加して砲弾の搬送等あらゆる手助けをしなければなりません。そのための訓練も通信勤務の合間にしっかりとやらされました。

十一月五日、護衛艦隊の「第十六号海防艦」に派遣され、駆逐艦に便乗してフィリピンのマニラに赴き乗艦しました。同日付で上等水兵に進級しました。

「第十六号海防艦」は排水量八五〇トンで、昭和初期に建造された旧型の艦でした。

私は本職の特信業務に就き、輸送船団護衛のため敵情報を得て艦長に報告していました。船団護衛のため高雄から南方へ行く時は、戦況悪化のため直行できなくなり、支那大陸の沿岸沿いのルートをとるようになりました。このため洋上を進

なものはありませんでした。

留守宅には連絡なしで突然帰ったものですから、父母ら留守家族は驚き、かつ涙で迎えられました。一同変りなく皆元気でいましたので安心しました。

海軍の略帽、線入り帽子を持ち帰りました。釜山引揚業務で釜山に行く者は軍服を脱いで平服で行きました。現地の感情を考えての配慮だと思います。

戦後六十年を経て従軍時代を振り返る時に、最も印象深いのは何んといっても海上護衛艦隊に勤務中のことです。「海防艦第十六号」に乗って輸送船護衛の任務に就いていた時の状況が今でも昨日のように浮かんでまいります。兵員、武器、弾薬、糧秣を満載した輸送船が敵潜にやられた時は、バラバラと船から落ちた兵隊が海一面に浮かんでいきます。

海防艦は救助よりも先づ敵潜を攻撃せねばならないのが任務なのです。そのためには爆雷を次から次へと投下しなければなりませんので、近くに

む日数も長くなり緊張した毎日の連続でした。たまたま寄港すると上陸してまず洗濯、給水が一番先にする仕事でした。

昭和十九年十二月、護衛艦隊司令部が台湾高雄から撤退して内地の門司に移転したのに伴い、我が海防艦も朝鮮海峡付近の海域に移動するようになりました。門司↑↓高雄、鹿児島↑↓高雄↑↓南方ジャワ島、セブ島その他の島々です。

昭和二十年三月、朝鮮済州島、臣文島方面での対潜水艦掃討作戦にも参加しました。

この頃、水兵長に進級しました。

昭和二十年六月、朝鮮の鎮海港で「第十六号海防艦」を下船しました。昭和二十年七月、東舞鶴に赴き艦隊司令部に着任、同時に二等兵曹に任官しました。

昭和二十年八月十五日に終戦となりましたが、私は満州開拓団の引揚げ業務を命ぜられ、十一月中旬までその業務に従事し、衣のう、毛布一枚、玄米二升を支給され復員しました。復員式みたい

浮いている兵隊がやられることがあります。爆雷の効果を確かめる方法は、先ず油が浮いてくるかどうか？ 潜水艦の破片が浮いてくるかどうか？ などいろいろあります。

次に敵の飛行機の襲来を早く発見して対空火器の能力を十二分に発揮せねばなりません。米空軍機のグラマンとロッキードのうちロッキードP38は双胴で、スピードもあり、低空でこられると発見と同時にバラバラと射撃され、非常に恐ろしい飛行機で、弾丸も大きく一発で脚が吹き飛ばされる威力があり要注意でした。海防艦の舷側の鉄板を貫通する威力がありました。

対空火器として二五ミリの三連装の高射機関砲で応戦しますがなかなか命中せず、銃身が真っ赤に、トロトロになるほどでした。高角砲も真っ赤になると太いロープを水に浸し砲身に巻きつけて引っ張り冷却します。

応戦が終わると早速、海上に浮いている陸兵の救助ですが、力尽きて浮いている遺体の収容はい

いのですが、生存者は舷側にロープを垂らして、これに取りすがるようにしますが、疲れ果てロープを握る力もなく水中に沈む兵隊もありました。遺体は甲板に並べ一体づつ毛布にくるみ浴室に積み上げます。身元の確認は兵隊の上衣の裏に氏名と住所等を書いた布が縫いつけてあり、それを記録整理するのです。当時の状況は回顧すればするほど、悲惨な情景ばかりでした。

海軍の戦闘は戦場が海の上であるので逃げ場が限られ、海防艦でも一戦闘ごとに十人は必ず戦死者が出ました。対空戦闘になると高射機関銃の台座でも薬鉄の山で、身動き出来ないほどになるのですから凄いものです。船団の損害は潜水艦よりも飛行機によるものの方が多かった。

海防艦の食糧は充分だったです。昭和二十五年五月二十七日の海軍記念日に朝鮮南部の巨文島に上陸したら、在住の日本人一家が歓待してくれました。

復員後、私は地元出身の愛野代議士の私設秘書

みたいなことをやりました。当時学制改革があり、青年師範学校が出来たので、教員になるため昭和二十一年四月に入学しましたが、九月に母が死去したので家業に専念するため退学しました。

海苔の養殖と玉ねぎの栽培を生業とし、地域活動にも専念し、青年団長や農業協同組合の監事を八年間、漁業協同組合の役員、厚生年金友の会会長等の公職を勤めました。去年やめました。

昭和二十年六月、朝鮮の鎮海港で「鹿島」が輸送船と衝突し損害を受けたので、舞鶴港の岸壁に固定し要塞として使用しました。そして終戦後は復員船に転用されました。